

第十一章 滿洲の電力と産業の將來性に関する觀察

一、滿洲に於ける電力は既述の如く火力電力より水力電力に漸次移行し、重要工業の發達も亦遂次大電力の需要を要求し來つたので、今後の電力問題は一に如何に水力發電を開發し得るやの問題と、一は大電力の需要を伴ふ重要産業が如何に計畫實現する可能性ありやの問題に歸結するのがある。

一九四五年終戦時に於ては滿洲の第二次産業、五ヶ年計畫著々進捗し、新に勃興せる水力發電の飛躍的發展と給結合し、全滿に互り重要産業が急速度を以て發展しつゝあつた、今之を地域的に大観すれば次のようである。

A 吉林地帯

本地帯は豊満水力電気の地元である、松花江の水質
 水量共に工業用として適当し、又附近には石炭及石灰
 石を多量に産生し、尚交通要地にも恵かれてゐる為
 に、カーボート系電気化学工業及メタール工業等の
 開始せられ得業を購目されてゐる。

B 安東地帯

本地帯は水豊水力電気は近く、水質水量共に工業
 用として好適し、用地亦岩大殊に大東港の築港
 建設せられ、且東遼道の資源及安奉線沿線の資源
 地域に近接する為、に軽金属工業・炭素工業・肥料
 工業・パルプ工業・繊維工業等の着手されてゐる。

C. 阜新・錦州地帯

秦高製

本地帯は阜新山元火力の大電力に近接し、石炭極めて豊富又熱河省錦州省の特産鑛物の豊富を有す、及この地方一帯の水質水量共に工業用として好適し、特に臺塩島築港に近き為肥料工業・石炭液化工業・特産鉄鋼工業等着々建設せられ將來一大工業地帯となるであろう。

ロ東遼道地帯

本地帯は鴨緑江各地帯の水力発電所及渾江各地帯の水力発電所に近接し、本地帯一帯に各種鑛物資源極めて豊富あり、特に鉄・鉛・石炭・石灰石・等膨大な埋藏量を有する為、電気製鉄・電気製鋼等の大々的に計画され、この地帯は將來の滿洲

に於けるルール地帯とも稱すべき前途有望の地帯
 がある。殊に大東港の築港と將來を以て連結する
 鐵道の完成する時は、本地帯を以て一大工業地帯
 ならしめるものであらう。

E. 本溪湖・鞍山・撫順。奉天等南滿中心地帯

本地帯は滿洲工業の中心地帯である、水豊・豊満
 の二大水力發電所及撫順の大火力發電所の近接し且
 之等の電力が二二万ボルトの超高圧送電線により連
 結されるが、その交通上の要衝と滿洲の中心部
 としての立地條件は、愈々本地帯を以て工業滿
 洲國の心藏部ならしめるものであらう、殊に現在既
 に鞍山・本溪湖の製鐵工業と、撫順の石炭・オイル

シエール・輕金屬工業・純鉄工業等の飛躍的發展
 格を以て中心とする 製塩業・輕金屬工業及奉
 天工業地帯に於ける各種金屬工業・機械工業・
 マグネシウム工業・纖維工業・パルプ工業等は既に重
 輕工業小國としての滿洲の面目を一段と高揚せしめ、
 一九四一年を第一年とする第二次産業五年計
 画の進展に伴い、本地帯は日本を除く極小
 に於ける重工業地帯として格目すべき價值ある
 發展性をもつる地域である。

F. 關東州地帯

鐵道及港灣の便に恵まれ、食塩及マグネシウム
 等豊富な地帯に接する為、且水量水力電

力の導入により化学工業、マグネシウム工業、及機械工業等が極めて盛賑である。本地帯は満洲開發の發祥地帯であつたけれども、水力電氣に恵まれたといふ地域であるのか之等の致命傷にあつたけれども、ニニカホルトの水力電氣の送電により本地帯の工業發展に一大革命を約束したものと云ふべきである。

9. 哈爾濱を中心とする北滿地帯

本地帯はソ連東侵の満洲に於ける根據地となつた地帯である事は歴史の証明するところである。殊に南滿鐵道と松花江水運の連繫する要衝に當り且つ北滿の膨大な數量を示す農林畜産物の

樺南製

集散地としての地位は北滿洲一帯を制圧してゐる。但し
 本地帯附近に鐵產資源が比較的乏しく、又電力不足
 が如実に示す通り農林産物を主原料とする農林
 産物加工工業、製油工業、鑛詰工業、纖維乃至ハ
 ルコ工業等生活必需品の輕工業等の勃興程度に
 制扼されるのは必然であつて、寧ろ之れ等物產の集
 散地的使用命に甘んずる傾向が顯著であつた。然る
 に豐滿水力發電により二二万ボルトの超高压送電
 線の導入せらるゝや、忽ち哈爾濱は従来の商業的地位
 を一變し、北滿に於ける重要輕工業地帯として
 召し込まれる事となり、北滿の開発と相呼ぶ應ず
 る輝き、前途を約束せらるゝようになった。

H牡丹江を中心とする東北滿地帯

本地帯は東北滿地帯に於ける交通の要衝に當り、
而も附近には石炭・黒鉛・木材・農林産物等の資
源に富み、鏡泊湖水力電力の導入によつて本地帯
をして往時の原野より一變と有るに至らしむる工業地
帯に躍進せしめたるがある。此に電力の導入は牡丹江
を以て数倍の活氣を増進し、東北滿輕工業地帯の
中心たる輝しき將來を望見せしむるものあり。
以上の如く各地帯が大水力電気及大火力電氣の開発と
送電線の完成により、各地域をして本来の特質を
十二分に發揮せしめたのみならず、滿洲をして飛躍的に工業
立國的基礎を確立したものであると断言出来ざるある。

操縦

以上は電力資源開發より滿洲産業の發達を觀察した
結論である。

2更に以上とは反對に滿洲産業の發展より電力の將來性
に就て觀察を試みよう。

滿洲は一九四一年第二次産業五年計画を樹立し、
鉄鐵年産三〇〇万噸・鐵鋼年産二〇〇万噸、石炭
年産六〇〇万噸・輕金屬其他非鉄金屬・液体燃
料・電氣化學工業製品等の増産を強行す
傍ら、農業生産方面に於ても灌漑及溼地干拓・
排水・アルカリ地帯の改良・農産加工及肥料増産
・農村電化等を目的として、少くも四〇万キロワット
(時)の増加を要求せらるる状況あり、又一方輕工業

部門も、金属工業・機械工業・及斯工業・紡績
 織布工業・窯業・硝子工業・石灰工業・パルプ及製
 紙工業等の電力需要も亦増大するべからざるもの
 あり、以上の諸工業及滿洲の文化發展は強い電力の
 飛躍的發展を要求し、殊に石炭需要の増大は今の
 火力發電の増設計画を以て、水力發電のそれに變
 更することを余儀なくし、前述第三五章末頃の
 如き水力發電の計画實現が要求されるところに
 ある。